

子どもの問題

一頃、子どもの学力について危ぶむ声が高まりました。「ゆとり教育」により、子どもの学力が落ちてきた、他国に比べて劣っているなどと言われていました。国は「全国学力・学習状況調査」を実施して、教育課程の改定や一学級の児童数を減らしたり、小学校での英語授業やプログラミング学習等の新しい試みも行っています。一部では、その成果は確かに上がっていると言われてしています。

しかし、子どもについては他の問題が深刻化しています。虐待、いじめ、不登校、引きこもり、貧困などがそうです。近年、特に虐待事案についての報道が多くなっています。幼い命が失われた事件を見聞きすると、心を締め付けられるように感じます。近所から子どもの大きな泣き声が聞こえてくると、少々心配になります。

昔に比べると、子育ての社会環境は著しく変化しました。わずらわしさを嫌った人々が、より束縛のない便利で過ごしやすい環境を求めに従い、核家族化や少子化、家族関係の変化、地域社会の変質が進み、結果、オープンな子育て環境が失われてしまったとも言われています。しかし、昔に戻ることはできません。社会の変化に合わせ、今ある社会資源やテクノロジーを最大限活用して、子どもたちが安心して成長できるようにすることが求められています。

厚労省は、4つの要素「親の子供時代の愛情不足」「生活ストレス」「社会的孤立（孤育て）」「親にとって意に沿わない子」がそろると、児童虐待が起こりやすいとしています。対策として、この4つがそろわないように「親へのサポートとケア」「子どもの保護や見守り」「援助者（相談相手）の存在」「育児支援（制度や事業）」を提唱しています。学校等・教育委員会・児童相談所・地域・警察・地方自治体・医療関係者・特別支援教育関係者・NPO等が連携して対応や支援をすることを求めています。つまり、「社会全体で解決する」ということです。

今、児童福祉法の改正等の法整備、地方自治体の連絡相談の拡充、保健や医療・教育現場でのサポート強化、保護者の意識啓発推進、地域の子育て支援サービスの充実など、社会全体で取り組む体制が整いつつありますが、日頃の挨拶や声掛けなどの我々ができる地域での何気ないコミュニケーションも、保護者の「孤育て」や「虐待」を防ぐことになると思われます。「社会全体で子どもを育てる」の「社会」には、我々一人ひとりも含まれているのです。